病院図書室　19(2):36-42, 1999

記念講演：近畿病院図書室協議会第25回総会

精神科領域における書籍と出版こぼれ話

中井　久夫

ご紹介いただきました中井です。本日は近畿病院図書室協議会の記念すべき第25回総会であるとうかがい、このような活動を地道に続けてこられた皆様に敬意を表したいと思います。何をお話しようかと迷いましたが、司書の方々の前ですから、精神科関係の図書、特に出版社を中心にお話したいと思います。むかしから、精神科の医師は本好きが多いようで、この県立尼崎病院のO先生などは装幀にもお詳しいようです。実は私も自分の本を出版する際にはたいてい装幀にも口を出しています。このように精神科の医師と本はとても近しい関係にあります。そのためかどうか、一部の全書、教科書は別として、金文字を使ってずっしりと重い医学書らしい本は少ないようです。特に、精神科関連の図書や雑誌を出している出版社にはそれぞれ個性があり、また、精神医学書出版に至る歴史も興味あるものがあります。

初めに雑誌から参りましょう。皆さん方の病院図書室には精神科関連の雑誌が多く収集されていると思いますが、『精神神経学雑誌』と言う雑誌がありますね。これが学会の公式の雑誌で英文版もあります（最近ラテン語から英語に標題を変えました）。学園紛争以前は学会長は東大教授、学会事務局が東大にあ

なかい　ひさお：甲南大学文学部人間関係学科教授
神戸大学医学部精神神経科名誉教授

り、論文もほとんど東大関係の人の論文、それも生物学系の論文しか掲載しない。そこで、東大の反主流派と京大が一緒になって、医学書院から『精神医学』を出したいきさつがあります。また、九州大学を中心に学会を別につくり、『九州神経精神医学』という雑誌を出しました。九州大学関係の論文を主として載せています。では、どこからが九州かといいますと、岡山以西が「九州」で、大阪市立大学も「九州」の飛び地です。面白いことに、各地方会の発表抄録は、たいてい『精神神経学雑誌』に載るのですが、近畿九大学の地方会だけは『九州神経精神医学』に載っています。これは大阪市大の前の前のK教授が橋渡しをしたのです。K教授は九大の出身です。

『臨床精神医学』（国際医書出版）は、紛争の後半に出て、初めは若い人の研修のための特集が多かったのです。東大系の人が出したのは、当時『精神神経学雑誌』が紛争関連

の議事録集のようになったからでしょう。出版社は元来外書輸入関係の会社かなと思います。つづいて、1986年に『精神科治療学』（星和書店）が出たのは、治療軽視を批判する臨床派を書店の社長が応援したからです。最近は、この雑誌も治療主義が薄れたと思う人たちが同じ社から『治療の聲』を出しています。その他、インターネットが発達し、神戸の震災で全国の若い精神科医が顔を合わせてから、私も知らないネットワークがあるようです。一度「インターネット医科大」から患者の紹介を受けたことがあります。

精神科の図書の出版に移ります。日本における精神科図書の出版社で、私がある程度知っているのはみすず書房、岩崎学術出版、金剛出版、星和書店の4社で、日本の精神医学関連書の7～8割は、ここが出版していると思います。医学書出版大手の医学書院、金原出版、中山書店からは教科書、大系以外ほとんど出ていません。どうも精神科の図書の出版は医学書出版の世界になじまないようで、採算がとれない（他科の医学書より安い）からか、一般書の書棚に並ぶ（そういう卸を通す競争の場に立つ）からか、気質（かたぎ）の違いからか、その全部でしょうか。では、これらの出版社が精神科の図書を出版するようになったいきさつを私なりにお話してみましょう。きっと独断と偏見に満ちていると思います。各方面のお許しを予め乞う次第です。

まず、みすず書房ですけれど、初代の編集長はたいへん気骨のある人で、関東大震災の折の朝鮮人虐殺の資料とか、日本の憲兵隊から占領地通貨工作、阿片問題の文書の出版を手がけ、『現代史資料』45巻続12巻は海外の日本研究を行う機関には必ずといってよい程揃っています。また、初期は『ロマン・ローラン全集』が表の主役でしたね。

では、なぜ、みすず書房が精神医学書を出版するようになったかですが、この編集長の奥さんが精神科医であるということがあろうかと思います。この奥さんの先生筋である日大の井村教授、村上仁教授（京大）など何人かの人たちによってみすず書房から精神医学関係の本が出版され始めたのです。ごく初期にまず『異常心理学講座』が3次に亘って出版されています。昭和20年代における第一次の『異常心理学講座』の衝撃力は、本が氾濫している現代の我々には想像もつかないものでした。この講座は、戦前の岩波の講座などがそうであったように、主題別に小さな分冊になっていて、それがいくつかいっしょになって外箱に入っています。図書館などでは盗まれやすく、全体は今では非常に手に入りにくいもので、復刊せよとの声があります。私が多少関係しましたのは第二次、第三次の『異常心理学講座』です。第三次の『異常心理学講座』はあと2巻残っていますけれども、ある大学の教授がお書きにならないで退職されたために出版することができないときいています。この場合は依頼原稿ですので、本人が執筆を辞退しない限りどうしようもなく、またそれが研究の進展がめざましい生物学的精神医学の巻で、すでに原稿を提出しておられる方々の原稿がもう全部古くなってしまっているはずです。おそらくこの巻はお詫びか何かを出して、もう出版されないのではないかと思います。

ちなみに「講座」という出版形式は面白いもので、出版社にとっては執筆者の品定め、力量を測るのにとても都合の良い試金石です。しかも、論文の中で1本だけ非常によい内容のものがあったら、それだけで売れるそうです。したがって、出版社にとって戦略的な意味を持っている出版物です。その良い例が岩波書店から1980年代後半に出版された『精神の科学』という講座でしょう。これは多分一万八千部出して、すぐに絶版にして、「精神の科学」シリーズのモノグラフを出していますが、岩波の精神医学ものの主流は岩波新書でしょう。

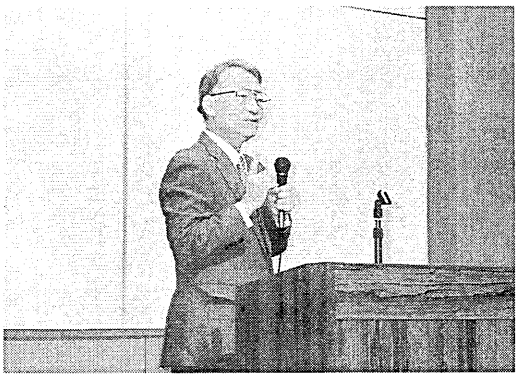
村上仁先生がE.ミンコフスキーの『精神分裂病』をみすず書房から訳出した昭和20年代の終わり頃には精神医学関係の優れた本の広告がよく出たものです。このミンコフスキーの本は大変良く読まれて今も出ています。これが非常に明快な翻訳なのは、訳者の村上先生によるところが多いようです。原文はそれほどでもなく、著者の他の本もそうでもない。したがって、明晰な村上先生が訳されたことによって分厚い原本がとても薄くなってしまったわけです。その時に広告された本の中でサリヴァンの『現代精神医学の概念』という本があります。これは私が友人と翻訳したものなのですが、広告が出てから実に18年後に刊行されて、広告から出版までの最長記録になっています。訳者は4人替わって、最後にまだ駆け出しの私のところに回ってきたというわけです。精神科の本の翻訳だけで生計をたてることは難しいので、医者が片手間にやるうちに歳をとって、地位があがって、忙しくなって翻訳どころでなくなるということがよくあります（外国では翻訳者の地位が低く、医者がやるよりも翻訳のプロがやります)。アリエッティの『精神分裂病』上下2巻も京都大学のグループに翻訳を依頼した後何の音沙汰もなく、やはり18年が過ぎて、もう皆忘れてしまっていた時に出版社にドンと翻訳原稿が持ち込まれて慌てたそうです。外国の著者にいわせると、俺の本はいくらたっても出ない、どうも日本は信用できないと、ちょっと国際問題になったこともあります。

翻訳に関して付け加えますと、日本の出版社には文学や芸術に詳しい編集者が多いのですけれども、編集者が原文と翻訳を照合するのは第一にみすず書房です。これは翻訳者にとっては恐い存在です。また、岩崎学術出版社のある編集者は、archivist を自称し、引用文献は国会図書館まで捜して原文はこうですと指摘されます。

この岩崎学術出版ですが、これはもともとちょっと左翼系の岩崎書店で、ソ連の絵本とか科学書を出していました。コマロフの『植物の起源』とか、チェコの美しい絵本が記憶にあります。これが岩崎美術出版、岩崎学術出版と枝分かれしました。今、本家の岩崎書店というのはどうなっているのか知りません。岩崎美術出版はドイツの美学者ヴォリンガーの『ゴシック美術論』などのいい本を出しています。

では、なぜ岩崎学術出版が精神科の本を出すようになったかと言いますと、どうも社長の御曹司が精神科医だったためでしょう。この方は慶応義塾大学出身で、日本の精神分析の草分けの一人である慶応学派の小此木啓吾教授のお弟子さん、現在は東海大学の精神科の教授をしておられます。ですから、まず精神分析叢書の出版から始まりました。この叢書は今から見ますと若干問題になる点もありますし、装幀なんかはよくなくて、今は歪んでしまっていますが、一時期、大きな役割を果たしたと思います。フロイト全集を除く精神分析の本はほとんどこの出版社から出ています。ただし、ごく最近の事情は存じませんが、長らく出版に際してすべて慶應義塾大学の精神分析グループの承認がないと事実上出版できないという制約があったときます。また、みすず書房が精神科以外の本を活潑に出版しているのにくらべて、岩崎学術出版は「学術」といっても精神科の本を中心にしているといった違いがあります。

ここで、ちょっと東京大学出版会に触れておきます。学園紛争の最中、精神科の研究をするのは犯罪行為に近いと言われていた中で、土居健郎先生、村上仁先生たちが中心になって分裂病のためのワークショップが毎年開かれ、その時の記録が本になって東京大学出版会から出版されました。1970年に第1巻が出て、最後は1986年の第16巻でした。私は第2巻の時からほぼレギュラーメンバーになりました。このシングルナンバーは非常によく売れました。現在は古書店でも入手しにくく



なっています。1980年代以後は精神医学分野の本が氾濫していますけれども、70年代は発表の機会がほんとうに少なかった。このシングルナンバーはそれぞれ何年もの研究成果が煮つまって、大変中味の濃いものです。

今までに紹介しましたみすず書房、岩崎学術出版、東京大学出版会に共通していますのは、戦後の女性進出の第一世代が編集者として活躍したということです。戦後まもなく、まだ女子大がなくて女子専門学校が女性の最高学府だった頃にそこを出られた方たちが出版社に編集者として迎え入れられるということがありまして、今はもう皆さん引退なさっておられますが、個性豊かな編集者の方たちでした。有名な神谷美恵子さんという精神科医はみすず書房の女性編集者と大変親しくしておられて、何か思いついてお書きになるとこれをその編集者に送っておく、そしてそれが溜まると本として出版するといった関係だったときいております。東大出版会のほうはKさんという女性編集者の一人が辞められてから精神科の出版はほとんど出なくなっています。分裂病のワークショップのシリーズは東大出版会から星和書店、人文書院というふうに出版活動が引き継がれて今も出ています。

金剛出版は以上の出版社より少し後発の出版社です。この会社はもともと医師が功成り名を遂げて引退するときの自費出版を手がけ、趣味で書いたエッセイや文学を載せる『医家芸術』誌を出版していました。そこにたまたま就職したのがN氏です。彼は出版界を渡り歩いた苦労人で百科事典のゴーストライターもされたようにきいています。この人が芸術療法（Art Therapy）に興味を持ち自分でもやり始め、この出版社に入社して精神科の本が出版されるようになったのです。
手堅い本が多いようですが、芸術療法や心理テストも目立ちます。また、日本の精神科医の著作集をよく出しています。

ところで、こうした出版社の社屋、建物がどんなものか、興味があるところですが、皆実に小さな建物です。みすず書房はドアを開けるとすぐに階段で、二階の、座るとギコギコ音のするスプリングのこわれたソファーの上に1冊何万円もする画集がポンと投げ出してある。私の友人のY先生（県立光風病院院長）などは、「これが最高の贅沢ですよ」などと言っておられました。ちなみにこの社屋はただの「しもた屋」にみえましたが、ある若い建築家がさる有名な建築家の若い頃の作品だと一目で当てました。（この建築はその後道路の拡幅のため立ち退きになり、今は小さなプレハブでやっています。）

星和書店もかなり遅れて、昭和40年代後半に発足した出版社です。最初は小売店でした。東京には非常に大きな本の小売のチェーン店があり、その一族だそうです。では、どうしてそのようなところが精神科に関する本を出すようになったのか。社長が「これでは日本の精神医学はいけない」と思われるような経験をなさったのではないかと思います。この書店が初めて出版した本が『精神科医ビスコット』、これはアメリカの精神科医を少し理想化して書いた小説ですが、これを社長自身が翻訳して出版し、書店名もペンネームからとっています。星野和雄というペンネームでした。

最初は小売店でしたから、精神科の本では

珍しい本まで品揃えしていて、また法律の雑誌などでも精神鑑定などが載っている号はとっておくというふうで、私たち精神科医には大変便利な書店でした。この書店もプレハブの建物で、松沢病院の隣にあり、こうした地理的な面から、出版品目に松沢病院や都立精神医学総合研究所の人たちの影響があります。この出版社は、日本の精神科医のオリジナルな本を出し、日本の精神医学のまとまった本を出版しているということで意義があります。単行本も雑誌も発行点数が非常に多いのですが、玉石混淆の面が惜しいことです。

精神医学の出版社と臨床心理関係の本をよく出している出版社は別なので、誠信書房や金子書房などの心理学系の出版社はよく知りません。精神医学と臨床心理は隣接領域ではありますが、精神医学の伝統と臨床心理の伝統は重なり合わないのです。たとえば、ケースのことを「事例」と言う場合には臨床心理であり、「症例」と言う場合には精神医学であるというように。

次に、こういった精神科の図書の出版を縦断的に見てみましょう。最初みすず書房から出版された本は翻訳が中心でした。翻訳するということは訳者にとっては極度に精読することで、当時の若い先生方はここで翻訳させて貰うことによって勉強した。それが昭和20年代から昭和30年代まで続いたでしょうか。したがって、私よりも3学年くらい上の年代の先生方はみすず書房で翻訳させて貰い、何か書かせて貰っても印税は期待するなというようなことを言い合っておりました。

出版界のことは皆さんの方がよくご存じかも知れませんが、日本では在庫本は出版社の資産として課税の対象になるのです。だから、年末になると本がどんどん断裁されてしまう。これは悪税ではないでしょうか。特に高価な本が断裁されますので、画集や詩集は、出版されたらすぐに買っておかないと大変ということもしばしば起こります。ところが、精神科の本を出版しているところは最初からベストセラーを期待していませんので、断裁することはあまりしないようです。特に、みすず書房の前のオーナーは倉庫会社の社長で、俳人中村草田男（『万緑』という雑誌を出しておられました）のお弟子さんで、また中国との書籍交流などもずいぶんやってこられて、日本の本の中国への寄贈も大いにやった方です。この人はオーナーなのに、一冊も「この本を出してくれ」という注文をされなかった高潔な人です。余談ですが、私も外国に行った際などにこうした国際交流の面では、名のある人たちよりも、日本では名前を知られていない方たちの力がいかに大きいかということを実感します。さて、倉庫会社の社長さんがオーナーだったためかどうか、みすず書房では10年は在庫を置いておくようです。私が最初にみすず書房から翻訳の依頼を受けたのは、サリヴァンの翻訳ですが、編集長に、20年は売りますので20年後にも通用する文章を書いて下さいと言われました。これは殺し文句ですね。大出版社の場合にはこうはいきません。社員も出版点数も多いですし、すぐに断裁しないと税金が大変です。だから、たとえば「漱石全集」なんかも、第何次漱石全集というふうに何かを変えて新しく発行するというようなことをやっているようです。欧米ですと、こうした代表的な著作は常備されているのが常識なんだろうと思っていましたけれども、今は欧米もあやしいようです。今の欧米は、出版社の吸収合併が激しくて、大学出版局以外は営利性が最優先になってきました。以上挙げた日本の精神科の図書を出版しているところはおおむね従業員が4～5人から、せいぜい20～30人でやっているのですが、大出版社の場合は何百人といるのでしょう。そうしますと出版点数を多くしないとやっていけないし、断裁しないとやっていけないという事情があるのでしょう。

アメリカでも1920年代にはなかなか自国の

精神科の本が出せなかったそうですが、日本でもまだ翻訳が中心で、また、半分啓蒙書半分専門書のような本が出版されています。70年代という学園紛争の時期には精神科の本を出版しているこれらの出版社はたいへん辛い思いをしたのですが、振り返ってみますと、先に触れました『分裂病の精神病理』をはじめとして大変良い本が多いのです。80年代は精神医学にとっては、アメリカのDSM-IIIとWHOの国際疾病分類（ICD９）が世界を席巻して、黒船のように日本に押し寄せてきた年代です。このDSM-III、あるいはICD９、ICD10は非常によく売れました。神戸ではＡ少年事件後、ジャーナリストが買ってあっという間に売り切れたということですが、こうした出版は医学書院が手がけています。アメリカでは主に法律家が買います。医事裁判のためでしょう。

ここで、少しフロイト全集、著作集について触れておきましょう。ご存じのようにフロイトは精神分析の歴史の中では非常に有名な人です。これを出版しているところは２つあり、一つは人文書院です。ここも精神医学のいい本を時々出します。京都の出版社で、２、３人でやっているというわさです。かつては『サルトル全集』が看板でした。（ちなみに、サルトルもロマン・ローランも本国では全集が出ていません。ヴァレリーもです。面白いことです。）もう一つはある新興宗教の出版社（日本教文社）です。これはどうしてかと言いますと、この新興宗教の２代目の教祖は東大の宗教学科を出て、宗教学も自分のところの宗教もという、いわば恐い者なしの人なのですけれど、その人がイニシアティブをとってフロイトの著作の出版をしたといういきさつがあります。

フロイトは、やっかいの種を播く要素がたくさんある人で、著作はもちろんドイツ語で書かれているのですが、英訳全集がドイツ語全集よりも先に出たのです。ドイツの精神科医が「フロイトは英語で書いたのではないか」と言ったという小話があります。ところが、この英訳が決してよくない。ストレイチの単独訳なのですが、その頃フロイトはナチスに追われて英国に亡命していたわけです。そこで英訳を見せられたフロイトは余り英語が得意でないので、これで良いとお墨付きを与えてしまった。そのため、フロイトの標準訳（スタンダードエディション）になってしまい、フロイトの著作と言うと、これに依拠するようになってしまったのです。もともとドイツ語で書かれたオリジナルの全集は、戦争中は焚書の対象で、戦後にようやく出版されたのです。このようにドイツ語全集よりも英訳の方が良く読まれますので、何とかこれを改訳しなければならないと、フロイトの末娘のアンナ・フロイトが死んだ途端に言われ出したのですが、改訳委員会は開かれてもすぐ大揉めに揉めるそうで、当分新しい英訳が出ることはなさそうです。もっとも、ストレイチの標準版は1999年現在英国ではもう出ていなくて、アメリカでペーパーバックで出ているのを買うしかないとききます。

日本では２種類の翻訳が出ていますが、フロイトは美しい見事なドイツ語を書く人で、これを日本語にする人は大変だったろうと思います。高橋義孝という有名なドイツ文学者がいましたが、その人によりますとトーマス・マンよりも難しいそうです。土居健郎先生－この方は日本のフロイディアンとして有名な方ですが－もやはり英訳で読んでおられるらしい。原典に当たらなければならないときにのみドイツ語で書かれたものを調べられるようです。ちなみにフロイト全集はフランス語訳も出ています。

一方、正統精神医学の方はと言いますと、日本で初めて翻訳されました大著が、昭和28年（1953年）ですか、カール・ヤスパースの『精神病理学総論』です。実はカール・ヤスパースという人は精神科医は６年しかやって

いなくて、後はこの『精神病理学総論』を改訂することをやっていた人なのです。それから、クレペリーンという精神医学者がいます。この人は教科書ばかり書いていた妙な人です。初版はとても薄い本でしたが、版を重ねるにつれて大部になっていった。第9版の途中で死んだのですが、彼は半年患者を診る、あとの半年は北イタリアの別荘で半年分のカルテを調べて教科書を改訂するといったことを繰り返していた人です。クレペリーンの翻訳が出ているのは日本だけでしょうね。クレペリーンの翻訳の中心人物が信州大学におられた西丸四方先生です。原書にある精神分裂病者の支離滅裂の状態を、日本人の患者の支離滅裂の表現に直すといった凝りようでありました。西丸先生についてちょっと申しあげますと、去年までは普通の年賀状をいただいていたのですが、今年の年賀状は迫力があり、「精神分裂病－ついに原因を知らずに死ぬのか、残念」と書いてありました。この先生は神谷美恵子さんのスーパーバイザーで、神谷さんは何かあると先生に相談されていたそうです。あと、正統精神医学でもう一人あげるとすればオイゲン・ブロイラーでしょうか。ブロイラーは『精神分裂病』も『精神医学教科書』も翻訳されているのですが、いずれもすぐ絶版になっています。本にも運不運があります。

最後に、精神科の図書の出版について一言申しますと、他の医学分野の出版においては出版社（編集者）は著者の言いなりになっているところが多くて、一字一句も修正を行わないところが多いように見受けられます。ところが、精神科の本の出版に関しましては、編集者と著者、訳者が侃々諤々意見を戦わせ、協力して本を出版してきた歴史があります。精神科の本の出版という、ほんとにお金にならないところで、精神科医と出版界とがこんなふうに仲良く、協力しながら出版活動を続けてきたということは編集者、著・訳者ともに珍しい分野ではなかろうかと思います。出版社の名で申しましたけれど、ほんとうは編集者と著者の人間的なつながりがすべてです。編集者がやめるとその社と切れるか、その編集者が紹介する新しい編集者と改めて人間関係をつくるかです。

当記事は、去る平成11年3月25日に兵庫県立尼崎病院講堂において開催された近畿病院図書室協議会の第25回総会特別記念講演の要旨を記事にしたものです。中井先生が、日本の精神科領域の書籍とその出版の背景について、初めてお考えをまとめて述べられた極めて興味深いお話でした。

ご講演を記事化するにあたっては、3名の講演記録ノートと録音テープを元に原稿を起草し、先生にご校閲をお願いして作成したことを、お断りいたします。

原稿起草：首藤佳子
ノート：大橋真紀子、田中典子、春日井泉江

（事務局・会誌編集部）